
生贖ゲーム

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生贄ゲーム

【Nコード】

N2853Y

【作者名】

うな

【あらすじ】

二十年前のサマーキャンプ。そこで行なわれていたのは残虐非道な生贄ゲームだった。

おそらく今世紀最悪の事件となるであろう『鮫島事件』。この発端は格別なんでもないどこにでもある　と言ったら顰蹙を買うだろうが　何の変哲もない殺人事件だった。

鮫島卓。今やどんなアイドルよりも知名度の高い大量殺人犯。毎日嫌でも顔を合わさざるをえない、ニュースの顔だ。

この男との因縁は……私自身かなり深い。当初はただの捜査対象の一人でしかなかったが、その後の進展で鮫島卓が私の人生に大きな影響を与えていたことが発覚した。

世に言う『生贄ゲーム』。経営する町工場の従業員を殺害した疑いで家宅捜索を受けた鮫島卓のパソコンから回収されたその動画データが、連綿と連なるおぞましいまでの罪を暴く鍵となった。

拉致監禁／未成年買春／人体解体ショー／拷問／カニバリズム／四肢をもがれた少女……。

それらは全て一つのネットワークで繋がっていた。非人道的行為の動画データを好んで買い求める富裕層　被験体となる『失踪者』を巧妙に作り出すアンダーグラウンドの住人　実行犯となる生粋のサイコパス。鮫島卓は後者の末端だった。

本来であれば実行犯に過ぎない鮫島の下に事件の存在を公に晒しかねない動画データが残っているはずはない。実行犯とそれを撮影する者は原則的に別であり、必然的に逮捕率の高くなる実行犯が動画を保持していることはあり得ない。姑息なまでの巧妙さで末端の足切りを徹底、犯罪動画市場の存在を隠し成長を促進し続けてきたからこそ『鮫島事件』が最悪足りえるのだ。

『鮫島事件』を皮切りに暴かれた犯罪動画市場　その顧客リストには名だたる面子の名が幾重にも渡る暗号処理をかけた上で記されていた。

辣腕の実業家、有名ロック歌手、大物政治家、果ては自衛隊幕僚長

まで。今日までに解析された分だけでも数ヶ月ワイドショーやゴシップ雑誌はネタに困らないだろう。

特にセンサーショナルかつ放送コードをギリギリ通過しお茶の間に届けられることとなり、犯罪動画の代名詞ともなった『生贄ゲーム』。それは私にとっては単なる証拠物件以上の価値を持っていた。あまりの重さに吐き気を催すほどに。

今から二十年以上も前……当時小学三年生だった私、鳳樹里は児童拉致監禁事件の被害者であると同時に『生贄ゲーム』の参加者だった。

平成元年、夏。サマーキャンプの折に私を含んだ小学生十名余りが拉致された。どのような経緯で拉致されたのか……詳しいことはもう流石に覚えていない。あの頃の記憶と言えば女に生まれたことを後悔させられるものばかりで、その強烈な責め苦以外の記憶は例えば、兄や妹がいつ死んだのかといった本来であれば大切なものも殆ど残っていない。それでも辛うじて覚えているのは間接的にはあれ、私が死に追いやった友人たち……つまり、『生贄ゲーム』の参加者の顔だ。

あれは確か秋だった。粗末なプレハブ小屋に詰め込まれた少年少女約30名（私たちの他にも拉致されてきた子供たちがいたのだ）が一桁まで減り、常時蒸し風呂に詰め込まれたような息苦しさから解放され、しかし人数が減ったせいで毎日の“仕事”が増えて結果的にはより消耗していた頃。拉致の実行犯の一人、顔の半分が削げている小男通称『ハンガン』が粗末な夕食を運んできた時に起こった偶然が全ての始まりだった。

バターロールが一個にスキムミルクがお椀に一杯、りんごが八分の一個。当時の食事にしては随分と豪華なメニューで、中でも瑞々しい切ったばかりのりんごには皆大いに目を輝かせた。

「さっさと食っちゃいな」

投げつけるような勢いで配膳を終えたハンガンは、彼専用のパイ

プ椅子に座りタバコをふかしていた。それはいつものことだったの
で私は特に気にもせず食事を摂ろうとした、しかし、

「あれ、あたしのりんごは？」

私のお盆にだけそこにあるべきりんごがなかった。周りを見回し
てみてもりんごがないのは私だけで、そのことにどうしようもなく
腹が立った。

「だれ！？ あたしのりんごどつたのだれっ！？」

……よくよく考えれば分かったことなのだ。りんごはそれぞれ八
分の一個、プレハブに残った子供は九人。最初からりんごは八人分
しか用意されておらず、たまたま私に回ってこなかった。これがき
つと真実なのだろう。けれど、その時の私は小学三年生で尚且つ生
きているのが不思議なくらいな極限の状態だった。今のように客観
的に、冷静な判断を下せるわけもない。

「かえしてっ！ あたしのりんごかえしてっ！！」

私は涙をぼろぼろ流しながら暴れまわった。それが引き金となっ
たのだろう、いつもうつろな目をしてるくに動きもしなかった子供
たちが一斉に暴れ始めたのだ。

「はっ、ははは！！ こりや傑作だぞ！」

きつとハンガンはそんなことを言ったのだと思う。タガが外れて
暴れまわり、あらゆる部分から体液を垂れ流す子供たちを前にして
下衆な笑みを零しながら諸手を上げて小躍りしていた。狂乱状態に
ある子供たちの中で私がハンガンの様子を見る余裕があったのは私
だけが自発的に暴れていてまだ自我らしきものを失っていないかつた
からかもしれない。

騒ぎは半刻ほど続き、私は結局りんごを食べることができなかつ
た。それどころか、皆が盛大に暴れたせいでバターロールは無残に
潰れ、スキムミルクはお碗の底に微かにこびりついているだけ。そ
の光景に酷く後悔したことを覚えている。私が騒ぎさえしなければ
……と。

しかし、後悔はそれだけでは終わらない。以後、意図的に食事が

一人分減らされ、代わりにハンガンの傍らに撮影担当のアシモがいることが普通になったのだ。アシモはサマーキャンプの引率の一人で、まだ楽しいサマーキャンプだった頃にASIMOのモノマネをコミカルに披露したことからそのニックネームが定着した。もつとも、この時になつてはその愛嬌のある名前も憎悪の対象でしかなかったのだけだ。

「さつさと食つちまえよ、ガキども」

タバコをふかしながらニタニタ笑うハンガン。一人分足りない食事。それは、決して充分と言えない食事でガリガリに痩せ細つた子供たちにはとても解決不能な難題だった。

八人分の食事を九人で分け合うという発想はなかった。人を思いやる優しさや道徳なんて攫われてから数週間で完膚なきまでに破壊されたし、争いを避ける賢さも空腹という根本的欲求には勝てず、結果。

「イケニエをきめよう」

九人の子供たちの誰かがそう口にした。もしかしたらその誰かは私だったのかもしれないけれど、明確に記憶はしていない。

「ジャンケンでイケニエをきめる。それでいい？」

子供たちはその提案に頷いた。きつと誰もがまさか自分が九人のうちの敗者一人になるとは思っていなかったのだらう。その浅はかさやどれほどの悲劇をもたらすとも知らずに。

「ジャンケン、ポン！」

勝負は七度ほど続いた。流石に九人もいればあいこが大量に出る。子供たちはあいこになり、勝負が長引くに連れて少しずつおかしくなつていった。それは焦りから来るものなのか、恐怖から来るものなのかは定かではない。しかし、七度目のあいこが出た時点で一人の女の子が 最年少の小学一年生の子が 狂つたような奇声を上げ、右隣にいた小五の男の子に飛びかかったのだ。

「ああああああああああああああああああああ！！！！」

「なっ、なにすんだお前！！」

男の子は反射的に腕で女の子を振り払った。そうでもしなければ身体はどこかを食いちぎられかねない迫力が女の子にはあったのだ。幼稚園から上がったばかりの身体の小さな女の子は野球で小麦色に焼けた男の子の腕に薙ぎ払われプレハブ小屋の床に叩きつけられ、そして動かなくなった。

「くっ、くひひっ！ いひひひひっ！！」

それまで沈黙を守っていたアシモが奇声を上げ、瞳孔の開いた目で子供たちを見た。

「いいぞ、いいぞ！ これは『生贄ゲーム』だ！ 君たちはまったくもって素晴らしい！」

まるでデキのいい生徒を褒めるように、狂った顔で優しく微笑む。「これはいい画が撮れそうだ！ そうだ、いいことを考えたぞ！

最後に生き残った子はお家へ返してあげよう！ どうだい、素晴らしいだろう！？」

ゲラゲラと哄笑するアシモ。ハンガンがたしなめるように何かを言うが、アシモは全く気にした風もなく笑いながら右手に持ったハンディカメラを操作する。

「今日のMVPはキミだ！ いや、素晴らしい攻撃だったよ！ キミには特別にご褒美をあげよう！」

そう言って、先ほど女の子を振り払った男の子にピカピカに磨かれたりんごを投げて超越した。男の子はびくりとも動かない女の子に視線を固定したまま、反射的にりんごを受け取った。

「さあ！ 食事の時間だよ子供たち！ 生贄ゲームはまた明日！ 今はしっかり食べて英気を養い給え！」

平成元年、冬。『生贄ゲーム』は突然の終局を迎える。私ともう一人の生き残りである女の子は断熱材の恩恵が受けられないプレハブ小屋の中、身を寄せ合いながらそれを聞いた。

「子供だ！ 女の子が二人！ まだ生きてるぞ！」

怒鳴り声。だけど、その奥に潜んだ優しさに涙を堪えることがで

きなかつた。私たちはぼろぼろ泣きながら、覚束無い足取りで声の主の下へ歩み寄った。

「もう大丈夫だ！ 安心していいから……もう誰も君たちに悪さをしたりしないから」

私を、そしてもう一人の女の子の姿を見てその人は悲痛な表情を作った。何があつたのか、ここで何が行なわれていたのか。きっと彼にはそれが一目で分かつてしまったのだろう。若気の至りで、その持ち前の正義感だけで私たちを見つけ出し、救い出してくれたその人は壊れかけの子供たちを優しく抱きしめてくれた。

「よく頑張った。本当に、よく頑張ったな……見つけるの、遅くなつてごめんなあ……」

その人は 私が一生涯をかけてその背を追うことになる優しく若い刑事は、私たちよりも多くの涙を流した。きっとそれは、救えなかつた子供たちに向けてのものだったのだろうと今に思ふ。

彼がいなければ私は死んでいただろうし、今回の『鮫島事件』も決して発覚しなかつただろう。彼は、今最も有名な刑事であり、近々彼の自伝やらドキュメント映像やらが世に出回ることになるだろう。警察機関の闇を切り裂く開拓者として彼の名前が世に知れ渡るのならばこんなに嬉しいことはない。そしてその手助けを私が少しでもできるのなら。

今、私は面会に来ている。相手は他でもない、鮫島卓だ。

強化プラスチックの向こう側、奥のほうからのろろと鮫島卓が現れる。薄闇の中、私は彼の顔を凝視し……やはりそうだったのかと核心を得た。

「……なんですか、刑事さん。これ以上話すことなんてないですよ。すっかりやつれた鮫島卓が投げやりに言う。私は、この二十年余りで皺が刻まれた彼の顔を厳しく睨みつけ、いつの間にかカラカラになつていた口を開く。

「お久しぶり。撮影者の後は実行犯になっていたのね、アシモ」
私の言葉に目の前のシリアルキラーはノ鯨島卓はノアシモは目を見開き絶叫した。

「く、かかか……くひひひひひひつ！ 生きていやがったのか！ 素晴らしい！ 君は素晴らしいぞ！」

哄笑 記憶の中のものと同じ。この反応、やはり鯨島卓はアシモと同一人物だった！

「くひつ、何故気づいた？ 何故俺がアシモだと。その頃の経歴は完全に消していたはずなんだがね」

「殆ど勘みたくないものよ。一応理由を挙げるならば、あなたがサマーカーンプ拉致事件で捕まっていなかったこと、それとあなたのパソコンから『生贄ゲーム』の映像データが出てきたこと。あなたたちのビジネスは基本的に分業制。実行犯は原則として撮影者にはならないし、データの販売もしてもらえない。それなのにあなたはあの『生贄ゲーム』の映像を持っていた。ここから導きだされる答えは、あなた自身が『生贄ゲーム』の撮影者で自分用の動画データを隠し持っていた、よ。本来であれば撮影者の手元にデータを残すこともルール違反なんでしょうけど、そんなものどうにでもごまかせるもの。あの事件で私が見た撮影者はアシモ、あなただけだったわ」

言い切った後で、随分と強引な推論だと心の中で嘆息した。昔の記憶なんてあてにならないし、アンダーグラウンドのルールなんて破るためにあるようなものだ。あまりに脆弱で、必然性に欠けた理論。

だが、それでも辿り着いた。一生残り続けると諦めていた傷に、再びメスを入れることができた。

「私があなたたち全員を死刑台へ送ってあげるわ。これは前哨戦、まずはあなたからね」

私の言葉にアシモは「くひつ」と小さく笑い、あの時と同じような瞳孔の開ききった目で私を見つめた。

「素晴らしい！ 実に素晴らしい！ 君こそが我々の求め続けてき

た存在だ！ もっとスリルを！ 我々に生の悦びを与えてくれたまえ！！！」

絶叫し自分の頭を殴り始めるアシモ。直ぐ様後ろに控えていた看守に羽交い絞めにされる。

これが悪夢の正体。私を、私たち『作り出された失踪者』を搾取していた巨大な機械の歯車の一つ。

この光景を私は決して忘れない。いつの日か、この狂った世界を叩き潰すまでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2853y/>

生贄ゲーム

2011年11月7日03時26分発行